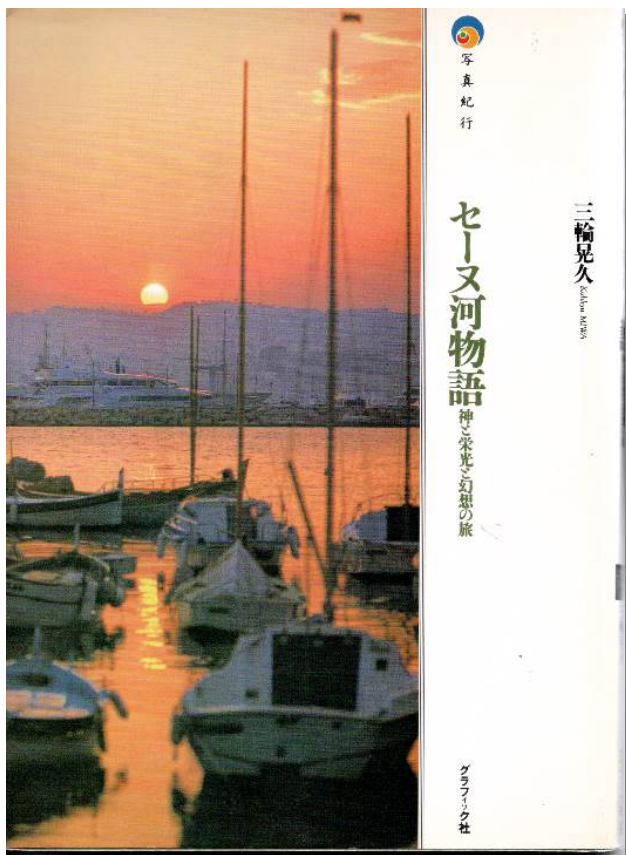


河川書の探求(11)

セーヌ川は流れる

古賀邦雄・古賀河川図書館 (JRRN 会員)

1. セーヌ川の流れ



油谷耕吉ら著『川と文化－欧米の歴史を旅する』(玉川大学出版部・2004)には、フランスの国土の60%が海拔250m以下の平地で、山岳地帯は東部と南西部の国境に位置し2000m以下の山が聳えたとある。フランスの四大河川は、セーヌ川、ロワール川、ギャロンヌ川、ローヌ川である。セーヌ川は長さ776km、流域面積78,650km²、源を中央山塊の北端ブルゴーニュの首都であるディジョンに近いタスロ山(海拔471m)に発し、広大なパリ盆地を緩やかに蛇行を繰り返しながら流れ、英仏海峡に注ぐ。

フランスの宗教は多数がカトリックであるが、セーヌ川沿いの神と栄光を綴った三輪晃久著『セーヌ河物語』(グラフィック社・1998)は、セーヌ河の源流から始まる。その源流には、パリ市所有地である立て札があり、水の精・裸婦像が右手に葡萄の房を持ち、ここから滔々と泉が湧いており、フランスに豊かな産物を育むことを象徴している。セーヌの流れにそって悠々と下っていくとセーヌ河畔は至る所に公園をつくり、森と古城と教会が続く。さらに下りフランスの都パリ、歴史を秘めたノートルダム、パリ

の石橋を下り、ヴェルサイユ宮殿、画家のモネの家を訪ね、シャンヌ・ダルクの処刑地ルーアン、第2次大戦の作戦地ノルマンディー、セーヌの河口へと流れる。

セーヌの名の由来が「ゆったりした川」として緩やかな流れと豊かな水量を誇っていることが理解できる。このゆったりとした川は運河と結ばれ舟運の役割を持つ。

2. パリの橋

セーヌ川は全長776kmのうち、パリ市内を流れる部分はわずかに10kmに過ぎないが、ここに架かる34基の橋はすべてパリの歴史と文化が凝縮されている。泉満明著『橋を楽しむパリ』(丸善・1997)、渡辺淳著『パリの橋－セーヌ河とその周辺』(丸善・2004)、小倉孝誠著『パリとセーヌ川－橋と水辺の物語』(中公新書・2008)では、セーヌ川と橋と都市の三つが一体となっておりなすドラマを論じる。ルイ・フィリップ橋は、橋の名であるルイ・フィリップ王が1833年に鉄の吊橋を架けた。1862年に改築され、長さ100m、幅15mの三径間の石造りアーチに変わった。



3. セーヌ川の洪水

パリの紋章はセーヌ川に浮かぶ船をあしらい「たゆたえども沈まず」とラテン語の文字が刻まれ、不滅のパリを象徴する。パリの町には、ヨンヌ川、マルヌ川、オーブ川、そしてセーヌ川の本川の水が全て合わさって入ってくる。セーヌ川は幾度となく洪水を起こし、不滅といえどもパリは水没している。1658年、1910年、1924年、1978年、1982年の洪水が特筆される。洪水は冬に起こりやすい。

佐川美加著『パリが沈んだ日—セーヌ川の洪水史』(白水社・2009)は、1910年1月21日から3月までのパリが大洪水によって巨大な湖となったことを分析する。

この書の表紙には、ボート上のパリの人々は上品な服装している洪水風景が掲載されている。オーステルリッブ橋における最高水位は8.62mに達した。被害は、パリ市内だけで被害者20万人、浸水家屋約2万戸、避難家族約1000軒、にのぼり、パリの首都機能が2ヶ月間麻痺した。

4. セーヌ川の治水対策

尾田栄章著『セーヌに浮かぶパリ』(東京図書出版会・2004)には、1910年のパリ大水害も追っている。その洪水対策を次のように掲げている。

マルヌ川のアンネットとセーヌ本流のエピナイの間に新たな放水路を500m³/秒を分流すると、1910年の洪水タイプではパリ市内では1.5mの洪水水位の低下が期待でき、それにセーヌの河床を掘り下げる事業がスタートしたが、第一次世界大戦により中断された。民間では1914年～1920年にかけて23基のダム群の建設によって、洪水水位を5m低減させ、セーヌの氾濫を防ぐとともにパリの上水道の水源を確保し、水力発電を興すシャバル計画が出された。アメリカのTVA計画よりも10年以上の前のことである。1924年再び洪水がパリを襲った。1925年シャバル計画のダム群の建設が認められた。現在までに、治水対策用のダム6基が建設され、セーヌ川上流の洪水調節容量は8億4,400万m³である。

<枯葉鳴るセーヌ河畔の古本屋> (戸崎治子)

